

T. Y. 29 歳 男性 身長 170cm 体重 68kg

主 訴：頭痛（左項部→後頭部→眼底を中心とした後頭部鈍痛）

咳・痰

睡眠障害（不眠と嗜眠の繰り返し）

集中力低下

現 症：(2005.9.19-10.8)

- ・ 9.19：風邪をひく（悪寒、薄い鼻水、喉の違和感）
→9.18 にウインドサーフィンレース（晴天、暑い）で、日中は風に吹かれる
- ・ 9.21-24：市販のかぜ薬（後藤散かぜ薬）服用
→9.22 に喉に痛みと腫れが出現
- ・ 9.24：悪寒と項部の強ばり出現
→葛根湯ドリンクを服用、喉の腫れ以外は軽減
- ・ 9.21-25：継続的な眠気におそわれる
- ・ その後喉の腫れは引いたが、違和感が残る
- ・ 10.4：鹿児島徳州会病院受診、抗生物質と粘液溶解剤を処方される
→服用後症状が悪化、薄かった痰が粘稠になり量が増え、咳もひどくなる
- ・ 10.7：自己弁証により麻杏甘石湯を服用、足湯とハッカ油マッサージを施して就寝したところ、多量の盗汗をかく
- ・ 10.8：起床時に激しい頭痛（主訴参照）および四肢のだるさを感じ、一日中起き伏しを繰り返す

既往歴：

幼い頃から偏頭痛持ちであったが、15 歳頃からは頻度が激減する。風邪をひくと熱はあまり出ないが頭痛になることが多い。昔から運動をするタイプではなかったが、2004 年春からウインドサーフィンをするようになる。2002 年秋に虫垂炎の手術を受けたことを除けば、入院経験はない。

<四診>

顔 色：やや火照った赤みが偏在するが、その他の部分は血色が薄い

動 き：手足の指先を動かすのが億劫

排泄物：便：ややゆるい、尿：色は薄く少量

発 汗：水分をとるとすぐに発汗する（多め）

音 声：力がない、ややコントロールできていない、話すと疲れる、聴力↓

食 欲：なし。食べると少し吐く。水分摂取↓

嗜 好：外食比率が高いので、脂もの・味の濃いものが多い

寒 熱：風に当たるのを嫌う（当たると寒がる）。うっすらと脂汗

舌 診：舌質やや紫

舌尖－舌中にかけて浅い裂紋（肺の気滞？）

舌中－舌根にかけて舌苔（白・滑・ジ・やや厚）→脾胃に寒湿？

胖大・齒痕（湿）

脈 診：左（血）：関にてやや洪、寸尺無力

右（気）：関にてやや滑（脾胃）

<八綱弁証>

表 裏： 裏 病が長引いている

寒 熱： 寒 風に当たるのを嫌う（当たると寒がる）

布団は掛けて寝る

虚 実： 虚 手足の指を動かすのが億劫、話すと疲れる、食欲↓

陰 陽： 陰

<病因病邪弁証>

裏 湿： 舌苔白・滑・ジ・やや厚→脾胃に寒湿？

<気血津液弁証>

水滯証（痰）

<臟腑弁証>

寒湿困脾→肺失宣降（咳・少ない痰）→肺気虚損（衛気不固・多汗）

<治法>

脾胃化湿し、胃の受納作用及び脾の運化作用を高めて肺気を補う（培土生金法）

<処方>

二陳湯

【組成】半夏 6g 辛・温・有毒／脾・胃

燥湿化痰・降逆止嘔・消痞散結

陳皮 6g 辛・苦・温／脾・肺

理気健脾・燥湿化痰

茯苓 4g 甘・淡・平／心・脾・胃・肺・腎

利水滲湿・健脾補中・寧心安神

甘草 2g 甘・平／十二經

補中益氣・潤肺・去痰止咳・緩急止痛・清熱解毒・調和藥性

生薑 3g 辛・微温／肺・脾・胃

散寒解表・温胃止嘔・化痰行水・解毒（半夏・天南星と併用）

【用法】生薑 3g・烏梅 1 個とともに水煎服する。近代では生薑・烏梅を用いないことが多い

【効能】燥湿化痰・理氣和中

【主治】湿痰

咳嗽・白色で多量の痰・胸が痞えて苦しい・悪心・嘔吐・肢体が重だるい・めまい・動悸・舌苔は白膩・脈は滑など

【病機】脾が健運できないために湿邪が凝聚し、氣機を阻害し鬱積して痰を生じた状態である。「脾は生痰の源たり、肺は貯痰の器たり」で、湿痰が肺を犯すと咳嗽・多量の喀出しやすい白色痰が、痰が氣機を阻害し胃が和降できないと悪心・嘔吐・胸が痞えて苦しいなどが、濁陰が清陽を阻遏するとめまい・動悸が、湿が脾を困阻すると食欲不振・肢体が重だるいなどが見られる。

【方意】燥湿化痰により痰湿を除き、理氣和中により脾を健運させて痰湿の発生を防止する。主薬は半夏で、辛温で燥性であるために燥湿化痰に最も適し、さらに和胃降逆・止嘔に働く。陳皮は理氣燥湿するとともに順氣化痰し、茯苓は健脾滲湿により痰の生成を防ぎ、炙甘草は健脾を助け諸薬を調和する。生薑は降逆化飲を補助するとともに、半夏の毒性を除く。少量の烏梅は肺氣を収斂し、半夏の散と合わせると去痰しても傷正のおそれがない。

（『中医臨床のための方剤学』神戸中医学研究会編著より抜粋）

<経過>

2005.10.9

朝より服用開始。昼の服用（服用 2 回目）から咳・痰の量が増加し、眠気を催して昼寝。昼寝から覚めると頭痛軽減、咳・痰減少し、思わず横になっていた倦怠感がなくなっている。食欲も回復してきている。夕方の服用（服用 3 回目）後に久しぶりの食事をとる。食欲は 8 割方戻っている。胃もたれなし。痰の量は極少量になり、乾咳の頻度が上がったため、化痰後の肺津不足を疑い、麦門冬湯を二陳湯に併用することとする。

麦門冬湯

【組成】 麦門冬 10g	甘・微苦・微寒／肺・心・胃 清熱潤肺・止咳
半夏 3g	辛・温・有毒／脾・胃 燥湿化痰・降逆止嘔・消痞散結
人參 6g	甘・微苦・微温／肺・脾 補氣固脱・補脾氣・益肺氣・生津止渴・安神益智
甘草 2g	甘・平／十二經 補中益氣・潤肺・去痰止咳・緩急止痛・清熱解毒 調和藥性
大棗 2g	甘・微温／脾・胃・心・肝 補脾和胃・養營安神・緩和藥性
粳米 10g	補脾益胃

【効能】 滋養肺胃・降逆下氣

【主治】

(1) 肺痿（肺陰不足）

咳嗽・激しい咳き込み・痰が切れにくい・喉の乾燥刺激感・口乾・舌質が紅で乾燥・脈が細など

(2) 胃陰不足

口渇・喉の乾燥・嘔吐・舌質が紅・少苔・脈が細など

【病機】 肺胃陰虚で氣機が上逆した状態である。

胃陰が不足して津液が上昇しないので口渇・口乾がみられ、胃氣が和降できずに上逆すると嘔吐を伴う。胃陰虚で虚火が肺陰を傷灼すると、肺陰も不足して肺氣が上逆するので、咳き込んで咳嗽が続き痰が切れにくく粘稠である。肺胃陰虚で咽が濡潤されず、虚火が上炎して咽が灼されるために、咽に刺激感があり乾燥する。舌質が紅で乾燥・少苔・脈が細は、陰虚を表す。

【方意】 肺胃を滋潤して上逆した氣機を下降させる。

主薬は甘寒の麦門冬で、大量に使用して肺胃を滋潤し虚火を清する。益氣生津の人參と補脾益胃の粳米・大棗・甘草は、中氣を健運することにより津液を肺に上輸する。辛温・燥湿の半夏を一味加えるのは、大量の麦門冬に配合することにより半夏の燥性が消失すると同時に、麦門冬の粘膩の性質を除くことができ、さらに半夏の降逆下氣の効能によって止咳・止嘔できるからである。薬味は6種にすぎないが、滋潤と降氣がうまく配合され、陰津を回復し虚火を除き、下氣降逆することができる。